



よ
へ
Welcome to
the Monkey House
(1968) カート・ヴォ
ネガット・ジュニア(伊
他訳) 浅田房吉(10/31刊・
¥1700)

まずはじめに『いい短篇集』と言っておき
たい。

ヴォネガットの短篇は、それほど数がある
わけではないが、五〇年と六一年にかけて書
かれた大半は、本書に収録されている。SF
ファンにとっての古典的な「ハリスン・パー
ジロン」「バーンハウス効果……」や、表題
作「モンキー・ハウス……」なども含まれてい
る。全体としての雰囲気は、過去のヴォネガ
ットそのものであり、いわゆる「SF」では
ない。エスクワイアやコスモポリタンといっ
た、当時のスリック雑誌に載った短篇は、割
とシャレた味を残していて、読後感もいい。
人間というのは、結局いたわりあって生き
ていかなくちやならない。とか、みんない
い人なんだ。とかいう、ヴォネガット節が、
一番素直な形であらわれている。それが、い
い短篇。と書いた意味である。しかし、時代
を越えた普遍性を持っていたかどうかは、や
や疑問なのだ。ヴォネガット最良の部分は、
他方、閉じた世界を感じさせてしまう。

日本人から見ると、だから、三十年前
のヴォネガットより、現代の村上春樹の方が
似合っている——たぶん。

(俊)